

開会挨拶

京都大学総長 湊 長博



皆さん、おはようございます。本日は土曜日にもかかわらず、第16回京都大学附置研究所・センターシンポジウムにお運びいただきまして、誠にありがとうございます。

今、司会の方からもお話がありましたが、実は、このシンポジウムは毎年この3月に実施しており、昨年、熊本で開催するというので、関係者一同、張りきっていたのですけれども、ご案内のような事情で中止せざるを得ないことになりました。今回もずいぶん心配していたのですが、ご覧のように、できる限り感染防止対策を取ったうえで、どうにか開催できる運びになり、私ども一同大変喜んでおります。ようやく熊本に来ることができたということでございます。

今日のテーマもコロナ禍ですけれども、新型コロナウイルス感染症ですね、COVID-19、です。これにつきましては、一昨年の秋・冬以来、中国で初めて発生して、世界中でパンデミックという状況になりましたが、突然人類の前に現れたわけですね。こういうものを新興感染症と言います。

皆さんもご記憶かと思いますが、これは新型コロナウイルス感染症に始まったことではありません。ここ数十年だけを見ましても、例えばアフリカで言えばエボラ出血熱、ウエストナイル熱。それから東南アジア、中近東を襲ったSARS、MERS、もう少し前になります。HIV、つまりエイズ、このような人類にとって非常に脅威になる感染症というのは、突然人類の前に現れてくるわけですね。なぜだろう、ということになります。

このような感染症は、ほとんどのケースが野生の動物から来るのです。もともとは野生の動物にいて、大きな問題もなく共存していたような病原体が、何らかの機会に人間に入ってきて、それが人から人へ感染するようになってくると、これが大きな問題になるのです。こういう病原体を人獣共通感染症と言うわけです。

これは歴史を遡ると、我々人類の過去1万年から現代までを考えても、様々な感染症をすでに経験しています。皆さんよくご存じの麻疹、はしかですね。それから結核、天然痘、インフルエンザ、こういったものも実は遡ってみると、もともとは野生動物が持っていた病原体なのです。麻疹なんかは、多くは牛とか豚、鳥等にいたのです。

それがなぜ人間に入ってくるようになったかということ、それは濃厚接触があったからなのです。おそらく数千年前から1万年ぐらい前までに、人類は色々な野生動物を家畜にしてきたのです。身近にそういう動物を置くことによって、今申し上げたようなプロセスで感染症が広がり、それが今となっては人類の病気として共存しているということになっているわ

けです。

ですから、このような感染症はある意味では、人間の活動性を反映するといってもいいかもしれない。似たような状況は他にもあります。例えば、今、非常に大きな問題になっている地球温暖化というのがありますね。今、地球は第四期の氷河期にあります。2、3百万年ですかね。その氷河期の間で、定期的に地球というのは非常に寒冷期と温暖期、氷期と間氷期と言いますが、それを10万年ぐらいで繰り返しているわけです。今、ちょうど地球は間氷期にあって、比較的温暖な、氷河が極地だけにあるような温暖期が、あと5万年ぐらいは続くであろうと想定されている。

そういう地球自体の自然の動きとは別に、ここ百年というオーダーで、地球の平均気温がどんどん上がってきている。そのスピードが非常に亢進しているということが、ここ10年、20年、大きな問題になってきているわけです。地球の平均温度が2、3度上がると環境が大きく変わりますから、地球にとっては予期せぬ大災害とか自然災害に結びつき得るわけですね。そういう地球の本来の姿とは別に、なぜこのような気温上昇が起きているかということについて、一番強力な仮説は、いわゆる温室効果ガスと言われる二酸化炭素等々が、どんどん地球の大気に蓄積されてきているからだと考えられています。

なぜ、そういうことが起こっているのか。自然というよりは人間の活動が、社会経済活動が、そのような状況を起こしてきたわけです。それがアクセラレート、加速化してきているということになります。それは化石燃料をどんどん使うというようなことに起因しているわけです。

ですから、パンデミックといい、地球の気候変動といい、ある意味人間の活動性が広がる。野生動物の世界へどんどん入り込む、野生との境界がなくなってくる。あるいは、化石燃料を多く使うというようなことで引き起こされているという要素が実はあるわけです。そういう中で、我々研究者、科学者というのは、そういうものにどう対応していくかという、非常に新しいフェーズに今入っていると考えるわけです。

ここで京都大学に戻りますが、京都大学というのは、19世紀の末に創立され、ちょうど来年で125周年を迎えるという非常に古い大学であります。その時代からの基本理念として、地球社会の調和ある発展・共存に貢献するというのを掲げてきました。基本的には、我々は研究をする大学です。研究大学と言われる大学です。約4年前に、世界の研究大学に伍して、日本で研究大学として発展するという期待を込めて、国から指定国立大学法人というものに指定されました。

京都大学には、今10の学部、それから18の大学院・研究科がありますが、それに加えて19の附置研究所や研究センターというのがあります。この19という研究所・センターの数は、日本中の国立大学の中でも群を抜いて多いです。これはまさに京都大学が研究大学であるということの所以であると考えられます。

このような研究所・センターは、時代の要請に従って、文系・理系、理論的な研究や、実験研究、フィールド活動等、非常に多彩な領域に及んでいて、とにかく研究を遂行するとい

うことをこれまで続けてきたわけで、多くの業績も出てきております。ノーベル賞受賞者やフィールズ賞受賞者も出ていますし、非常に活発な活動を展開してきたのです。

我々研究者が研究室でどのような研究をしているかということ、皆さんに知っていただきたい。我々はこのような活動をし、こういう成果を上げたということをぜひ多くの皆さんに知っていただき、また皆さんからのフィードバックを受けて、今我々が研究の世界で求められていることをよく知ったうえで、これからも実践していきたい、ということ趣旨として、この京都大学附置研究所・センターシンポジウムが10年以上前に始まったわけでありす。

ぜひ、こういう機会を通じて、皆さん、とりわけ今日も多くお越しいただいておりますが、次世代を担う若い皆さんに、私も研究をしてみたいというような、研究に対する興味や関心を持っていただければ、我々としては大変喜ばしいことだと心から思っております。

本日は新型コロナウイルス感染症の話も多く出てまいります。多数の研究所・センターの中から、七つの研究所・センターを代表してプレゼンテーションを予定しております。ぜひお耳を傾けていただいて、質問やご意見等々があれば、フィードバックをいただければ幸いです。

本日は少し長丁場になりますけれども、私ども京都大学の活動と、その最新の研究成果についてお楽しみいただければありがたいと思っております。本日は、どうぞよろしく願いいたします。